

この部屋から、旅に出よう。

Vol.3

Platform

予測不能な世界が

大口を開けて待つ。

未来の街の中に

Station

- VRChat : Resting Reamins
- cluster : チキンASMR
- NeosVR: Torazo's World
- Real.W : 新宿・歌舞伎町

Platform Vol.3 contents

Gravure: ORGANISM 4
Resting Remains VRChat 14
チキンASMR cluster 20
Torazo's Worlds NeosVR 26
新宿・歌舞伎町 Real.W 34
あとがき 40

第3号のテーマは「混沌」。

混沌というのは、全てが未分化で無秩序な状態のことだ。順序が整っておらず、形が定まっておらず、人を不安にさせる。

だが、この膨大な無秩序はきっと可能性なのだ。混沌の渦の中から分化し、秩序が生まれ、カタチが定まっていく。その行為を「創造」とよぶ。

混沌の中から創造された今号が、また新たな混沌を産むことを願おう。

編集長

世界には、色々な町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」



Welcome home.



...to the world of CHAOS.



ORGANISM

ORGANISM

The word "ORGANISM" is displayed in large, white, serif capital letters, tilted diagonally upwards from left to right. It is overlaid on a collage of four images. The top-left image shows a close-up of a film reel with red liquid dripping from a tube. The top-right image shows the interior of a train car with two glowing circular lights. The bottom-left image shows a hallway with doors and a green wall. The bottom-right image shows a tunnel with colorful, glowing light at the end.



ORGANISM

ORGANISM



World: ORGANISM Created by DrMorro

徐々に慣れてきた私の目に映り込んできたのは、はらはらと露のようないわが舞い散る殺風景な世界だった。

眠ル混池

Resting Remains

VR CHAT

写真／みくにき

形を保つことを止めた建造物が数点、明度の低いこの世界に、無秩序に放棄されている。耳には音数の少ないピアノと、揺れるチエロの音と、誰かの（もしかすると私自身のものなのかもしない）後悔を飲み下すかのような微かな吐息だけが聞こえる。ワールド「Resting Remains」。安らぐ遺物、といったところなのだろうか。降り続く灰と、腰辺りの高さまで伸びた雑草達の笛鳴り以外が全て静止したかのようなこの世界には、時間すらも灰かいど土の下で眠っているかのように感じる。

一先ず右手の彼方へと砂漠のようないわが道を踏みしめ歩み始める。少しすると見えてきたのは変圧器、だろうか。近寄ってみると、過去に何かを制御していたであろう、人の背丈ほどの高さがある機器の類が寄り添うように灰かいど土に沈んでいた。彼らも今は眠っているのだろうか。機械音一つ上げない金属製の肌にはもう熱は宿っていないだつた。

彼らの肩口の先に9本の小さな光が見える。少し歩を進めるとそれは、天から糸を垂らすように備え付けられた蛍光灯の明かりであることが分かった。誰かを照らすわけでもなく、彼らはただ自身の光で糸の影を傍らの中へ焼き付けていた。異質で、異常で、背に寒気が走るような静けさを感じた。昔、父を迎えるに向かった夜の空港の、人気の無いターミナルに落ちる電光でも想起したのだろうか。

踵^{きびす}を返し、足早に電光の許を離れる。降り続ける灰を払いながら、歩む。人は前に進む生き物だから、今という時間で前に進める生き物だからなどと、とにかく何か理由をつけて一步でも先に進みたいと思つた。薄氣味の悪さから逃れるためだらうか。いや、違う。この世界

に、得も言えぬ安心感と心地良さを覚えつつある自分に気が付いたからだ。

草臥^{くたび}れて沈むモニュメントに沿つて歩いていると遙かに聳^{そび}える枯れた木々達が現れた。薄い霧を搖らす木漏れ日に腕を引かれ木立に寄る。厳然でいて、森閑。しかしどこか憂いと懐かしみを覚えてしまうそれは、昔、旧友とよく登った実家

近くの小さな山の静けさに似ていた。足が動く。木立の先に忘れていた誰かの温もりがあるかのように感じて、居ても立っても居られず、足が灰土を蹴つっていく。

ぼんやりと立ち尽くしていた私はふと、何かに誘われるかのようにメニューを開き、ワールドの説明文に目を落とす。そこには簡素な英文が書かれていた。

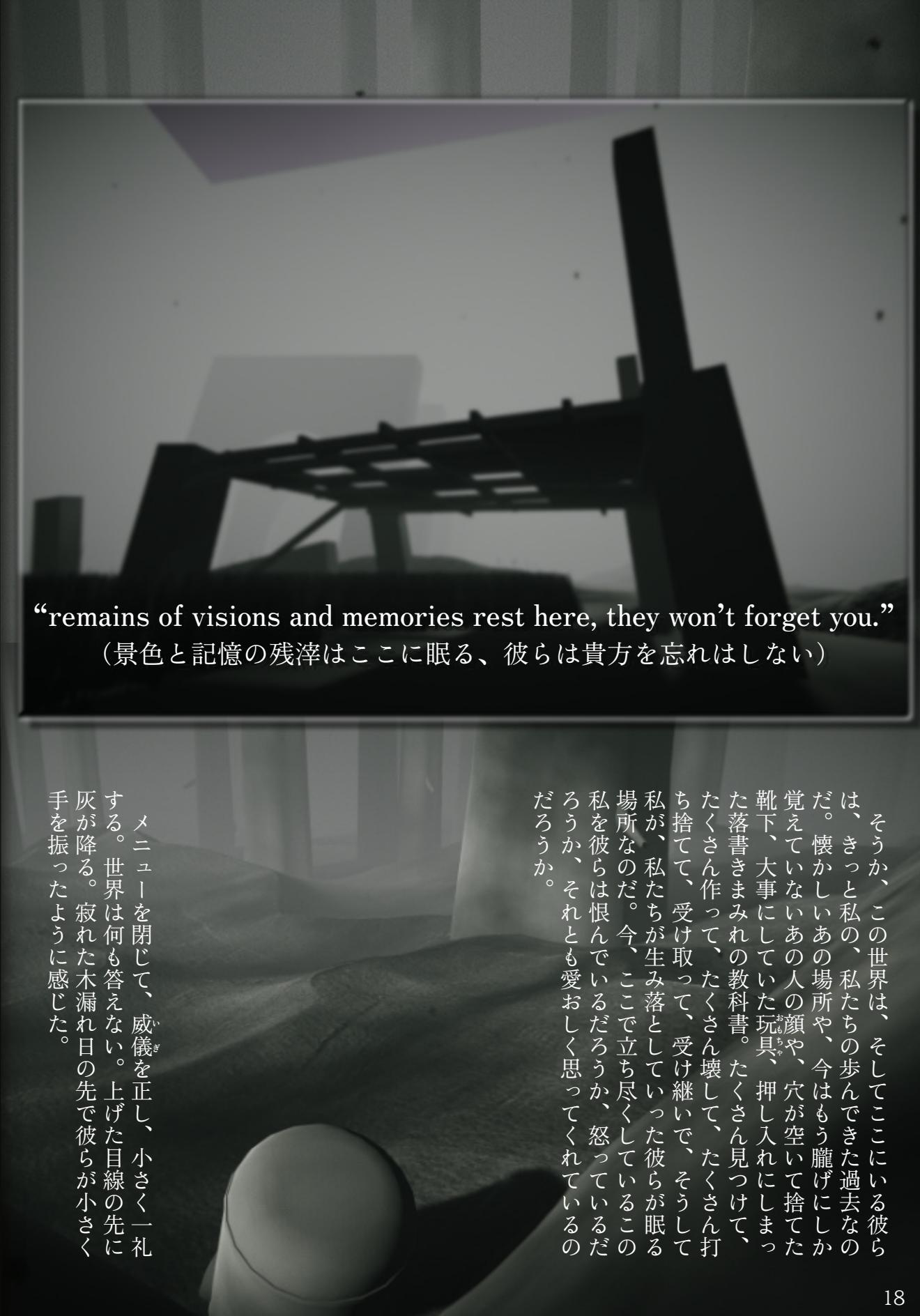


(文・ヤマノケ)

苦しくなるほどに、人は無秩序の世界から光を求めて前に進んでしまう。夜明けを目指してしまう。目指すようにプログラムされているのかかもしれない。そうして人々の歩んだ後には膨大な過去が降り積もっていく。過去はいつまでも我々を見守っている。彼らに顔向けてきるように、我々は歩を進め続けなければならぬ。私は振り向く、再び歩み出すために。微笑むかのように見える淡い光景を背に、私は開闢を求めてこの世界を後にした。

Resting Remains (作: Karl Kroenen)

[ACCESS](#) in VRChat



“remains of visions and memories rest here, they won’t forget you.”
(景色と記憶の残滓はここに眠る、彼らは貴方を忘れない)

メニューを閉じて、威儀を正し、小さく一礼する。世界は何も答えない。上げた目線の先に灰が降る。寂れた木漏れ日の先で彼らが小さく手を振ったように感じた。

なんか、この世界は、そしてここにいる彼らは、きっと私の、私たちの歩んできた過去なのだ。懐かしいあの場所や、今はもう隠げにした落書きまれの教科書。たくさん見つけて、たくさん覚えていない人の顔や、穴が空いて捨てた靴下、大事にしていた玩具、押し入れにした落書きまみれの教科書。たくさん見つけて、たくさん打ち捨てて、受け取って、受け継いで、そうして私が、私たちが生み落としていた彼らが眠る場所なのだ。今、ここで立ち尽くしているこの私を彼らは恨んでいるだろうか、怒っているだろうか、それとも愛おしく思ってくれているのだろうか。

恐怖の 力オス

全ては私の無邪気な一言が始まりだった。「clusterのカオスなワールドに案内して欲しい！」と。

著者もVRでの活動を始めて約二年。VRChatを始め、有名どころであるカオスなワールドについては、ある程度知っているつもりだ。ところがclusterにおけるカオスなワールドについては無知である。

なるほど、あの笑える音を存分に味わって、皆で大爆笑ワールドか。耳かきやドライバーの音を楽しむASMRワールドはいくつか知っている、それと似たようなものか。……なんて今にして思えば、浅はかな考えに過ぎなかった。

よつてclusterに詳しい私の知人、ルナ紅音氏に、カオスなワールドへの案内をお願い申し上げた。（ルナ氏にはこの場をお借りして、感謝を申し上げます）彼女は私の図々しい願

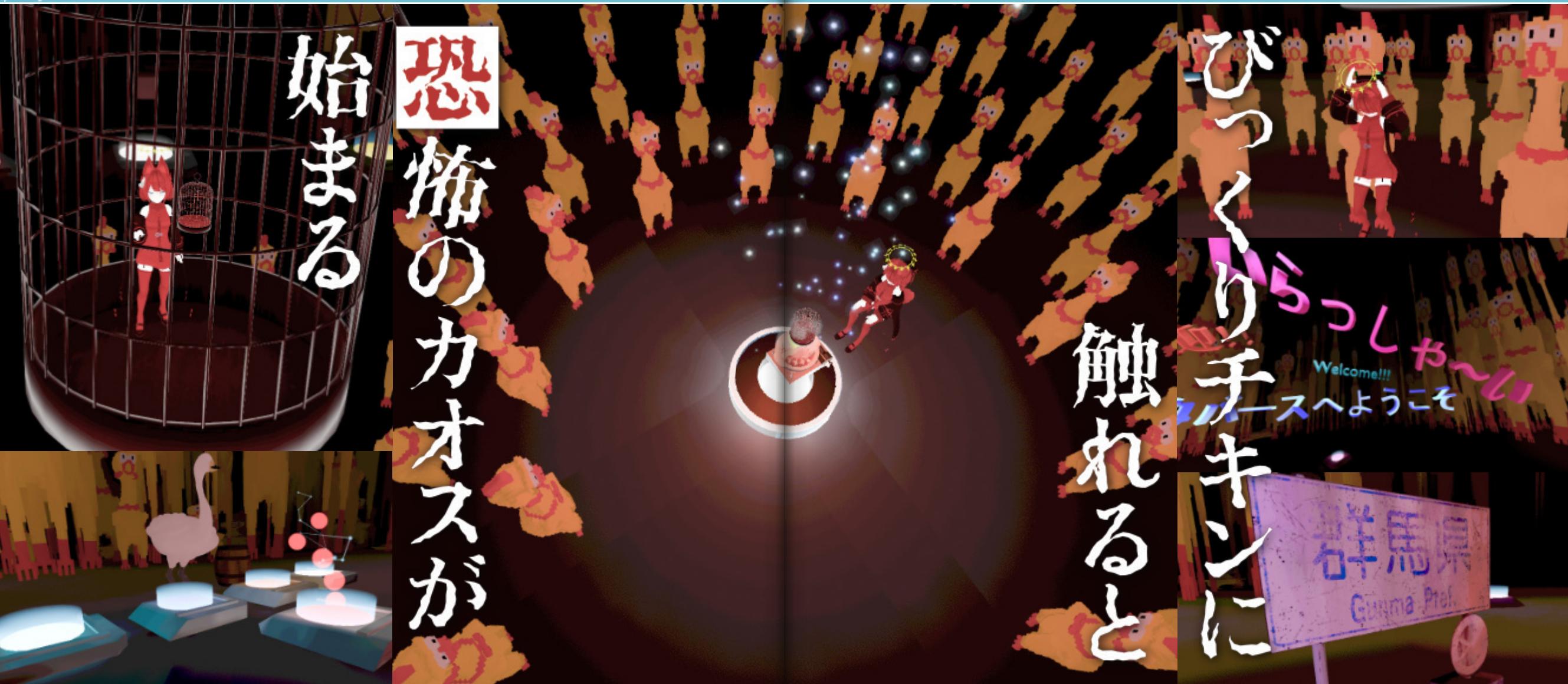
いを喜んで引き受けて下さった。彼女が即答したことで、私の期待が高まる。だがこの時の私には、想像を絶する恐怖が待ち構えていることを、知る由もなかつた。



写真／s u n



じゃあ、いいつか。



カオスとは対極に位置する、神聖にして壯麗たる空間。しかし私は、本能で理解つてしまつた。これは嵐の前の静けさだと。ラスボス戦の前にある、場違いに安全な最後のセーブポイントのような場所だと。最悪の時間を迎える寸前のように、心臓の鼓動が早くなる。

私とルナ氏は鎮座するチキン様に謁見を求めた。「いらっしゃい。うん、「また」なんだ。済まない」と、チキン様は某巨大掲示板で有名なコピペ文を喋り出す。そうだ。このコピペ文は、この後に起ころる出来事について謝罪する際の定型文。裏を返せば、ここからが本当の地獄だという訳だ。

やがてチキン様が「じゃあ、いこうか」と語りを終える。ルナ氏に促されると、私は固唾を飲んでチキン様に触れた、その後――

「いらっしゃい」「メタバースへようこそ」「――! 欢迎!!!」

「Welcome!!!」

星が消えた宇宙のような闇に浮かび上るのは、インターネット黎明期のホームページを思わせる、クソダサ3Dフォントによる歓迎の文字列。そう遠くない場所で巨人もとい巨チキンたちが、戦列を組んで私を睨む。恐れ多くも、立ち尽くしている場合ではないとすぐに悟る。あろうことか、私は鳥籠の中に囚われていたのだ。ルナ氏も別の鳥籠に囚わっていた。お互いが空中に浮かぶ鳥籠の中に。まさか、人間が鶏肉を貪つていた報いを受けるように、今度は我々が食われる側になるというのか？

視線を下に向けたとき、その予感は的中した。できれば的中させたくないかった。等身大のチキンどもが、地上で輪を組んでいる。磔にされる代わりに、鍋で煮られる生贅のチキンを取り囲むように。邪悪で陰湿な儀式そのものだつた。このままでは、私も同じ末路を迎る。

ふと、鳥籠の中央に、ミニサイズの鳥籠が設置されていることに気づく。これが脱出口かもしれない。淡い期待を抱いて触れる。致命的なミスだった。

迫り来る恐怖のチキンたち

私は生贊に捧げられた。地上にテレポートされたのだ。チキンどもの輪の中へと。鍋で煮られる一体のチキンと向き合うように。「おまえもびっくりチキンにならないか?」とでも言いたげに、鍋で煮られるチキンは視線で私を射貫く。さながら、腐敗した豚の頭部を依り代にした蠅の王と対峙する嫌悪感、そして恐怖。

ルナ氏も一足遅れて地上に降り立つ。すかさず私は彼女に「脱出しよう!」と懇願した。そうして共に、虚な視線で呪文を唱えるチキンどもの間を縫って走る。輪の外には無数のボタルがあって、その内一つへと駆け込んだ。辛うじてSAN値が尽きる前に脱出、急死に一生を得る。

逃げ込んだ先は、不穏なBGMが鳴り響くホラーワールドのエントランス。それでもチキンどもの洗脳呪文に比べれば、むしろそよ風のように心地良く思える。

落ち着かせている私に、ルナ氏が後味が悪くなる事実を告げた。なんとこのチキンASMRに繋がるポートタールは、cluster中に点在しているらしい。ホーラワールドは勿論、平和で美しいワールドさえも。

チキンASMR。それはcluster中のカオスが流れ着く最終地点。あなたに足元に這い寄る混沌、その最深部に他ならない。

(文.. sun)

その時、初めて私は思い知る。チキンASMRの意味を。

周囲からは、無数のチキンが例の間抜けな音を絶えず発していた。底知れぬ闇に、チキンの鳴き声が延々と木霊する。邪神を崇める呪文のように思われた。気が狂いそうだった。



あなたはもう逃げられない

チキンASMR (作:ほびわん)
ACCESS in cluster



NEOS
THE METAVERSE

Torazo

写真／オージュ

「まので夢を見にかかるのよ」

カオスを形容する慣用句の一つだ。それは物理法則を無視した浮遊感や、秩序さを内包する。そんな夢の世界を、いつまでも見たいと思ったことはないだろうか？

VRアーティストのTorazo氏の作品は、そんな夢のような世界に貴方を誘う。今回は彼女が創ったワールドを三つ紹介しよう。

まずは”Maliruv Dum”…チエコ語で「絵描きの工房」という意味のワールド。海に浮かんだ小さな島に降りたつたら、ソファーに腰掛けてみよう。海面から顔を出す、口を大きく開けた鬼の顔を模した巨大な門が、小刻みに震え続けている様が見える。これは「笑う門には福来る」の諺から来ている。

Torazo氏は仰った。「家族の影響で、おどろおどろしい鬼が出る昔話やホラー映画をよく見ていた。それにより、世間一般で言うグロイもの、キモいもの、あの世を思わせるものや爬虫類の造形などが好きになつた。それが私にとって、幸せな夢になっている」。言わば笑う鬼は、Torazo氏が思い浮かべる夢によ

って、訪れた人を幸せにしたい想いの結晶なのだ。

ところでNeosVRでは、基本操作で空中を飛ぶ。マウスならホイールボタンを、Meta（Oculus）QuestならばBボタンを押して、移動方法を選択し、フライかノークリップを選ぼう。フワッと浮き上がるごとに成功したら、空中を游泳する七色の海亀に近づく。背中をマウスでクリック、MetaやOculusならトリガーを引いて、〈アンカーに入る〉を選べば海亀と一緒に游泳できる。視界の果てにある、吸い込まれるようなフ

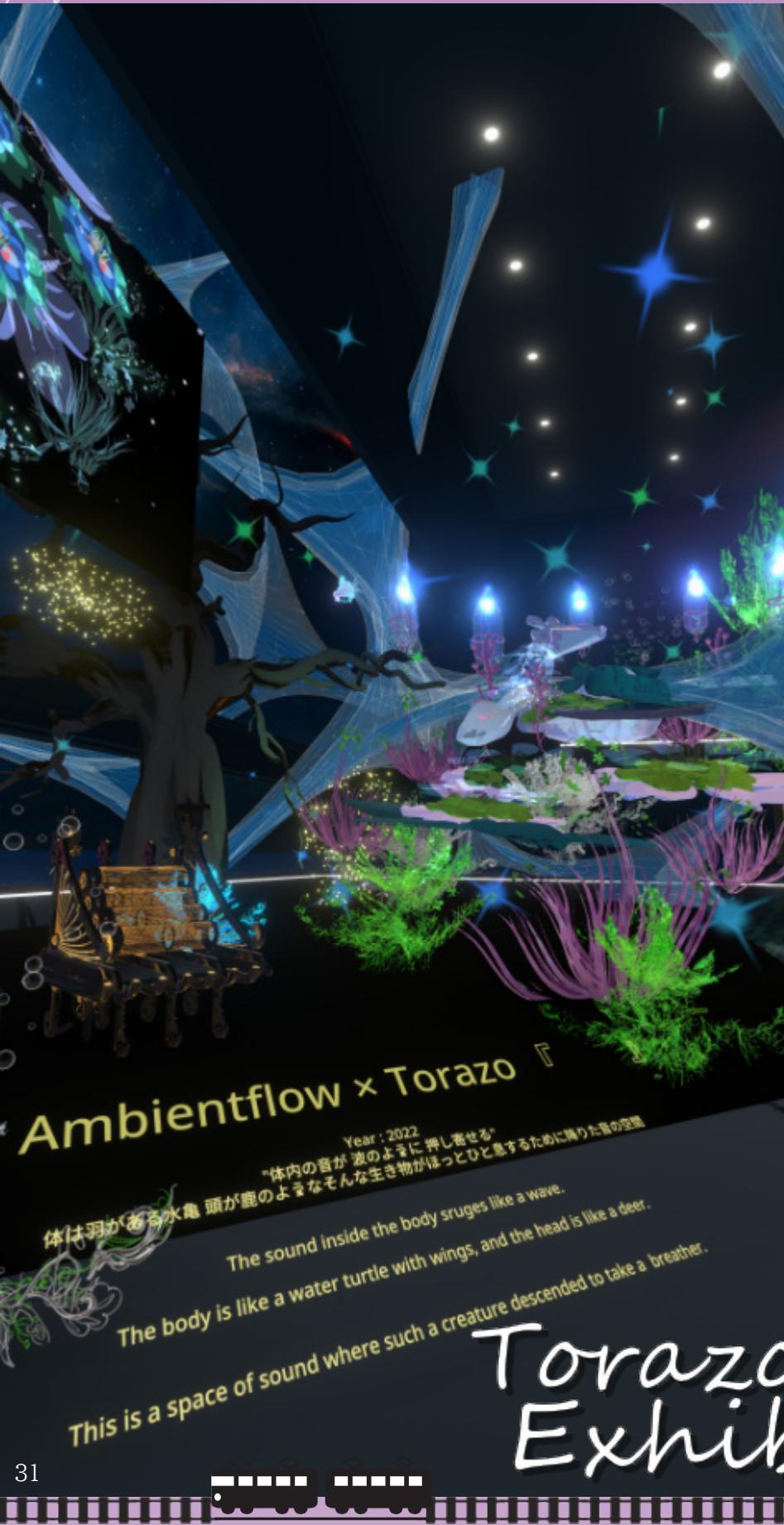


ラクタルアートをぼんやり眺めれば、きっと嫌な現実を忘れられるはず。

ノーカリップの話が出たのでそれを活かしたVRアートも紹介しよう。

二つ目のワールドは”Blue-relax-”…憩いの場所として活用して欲しいという願いが、その名前にも籠められている。原始的な生物が海中を揺蕩う様子は、創世記のような雰囲気を目指したとのこと。生命が芽吹いた原初の時代、それもまた一つのカオスであろう。

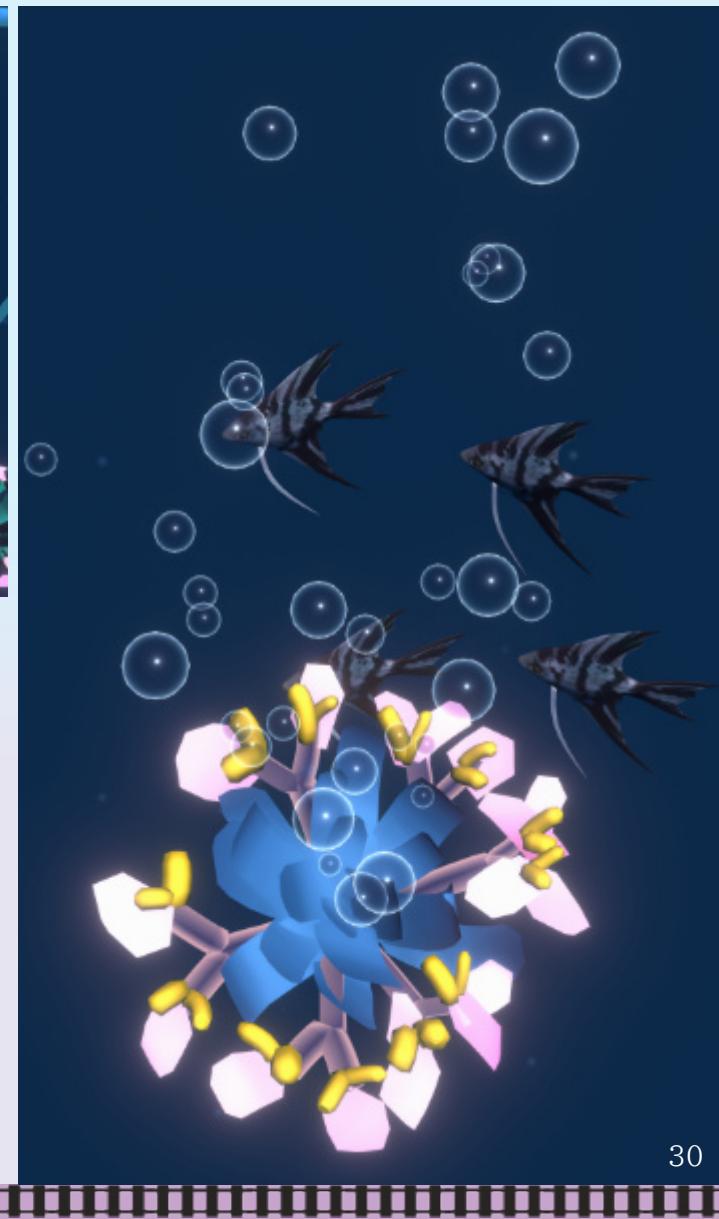




最後に紹介するのは”Torazo Solo Exhibition 2022”つまり彼女の個展だ。百鬼夜行というワールドテーマに違わず、エントランスから奇怪ながらも美しい造形の数々が出迎えてくれる。

さて本題だが、中央のクリオネには「真下のお花を辿って…」と書かれている。先程と同様に、移動方法をノークリップに選択（フライでは駄目）。このモードでは壁や床をすり抜けて移動できるから、真下にあるお花を視線に捉えて、深く海に沈んでみよう。浮き上がる泡や幻想的な花々に、どこか母性のような安心感を覚える内に——小さな秘密の部屋に辿り着く。

ここにあるソフアードに座ってブクブクと、安心感を齎す環境音に包まれながら、好きな動画などをゆっくり観るには打ってつけだ。



メインホールに展示されているのは、音楽パフォーマーK.(くう)氏との合作、『星-Hoshi-』。『作品名はなく、自由にタイトルをつけることができます』とのこと。K.氏が奏でる

『星-Hoshi-』は、静かに明滅するような繊細で幻想的なピアノの旋律。私はこの旋律を、VRの様々な場所で聴いたことがある。あらゆるシンに合わせて、想起させる感情を千変万化させる、真っ白なキャンバスのような不思議な曲だ。Torazo氏が受けたインスピレーションからは、まだ見ぬ生命が羽休めするのに相応しい、草木に溢れた「音の空間」が生まれた。

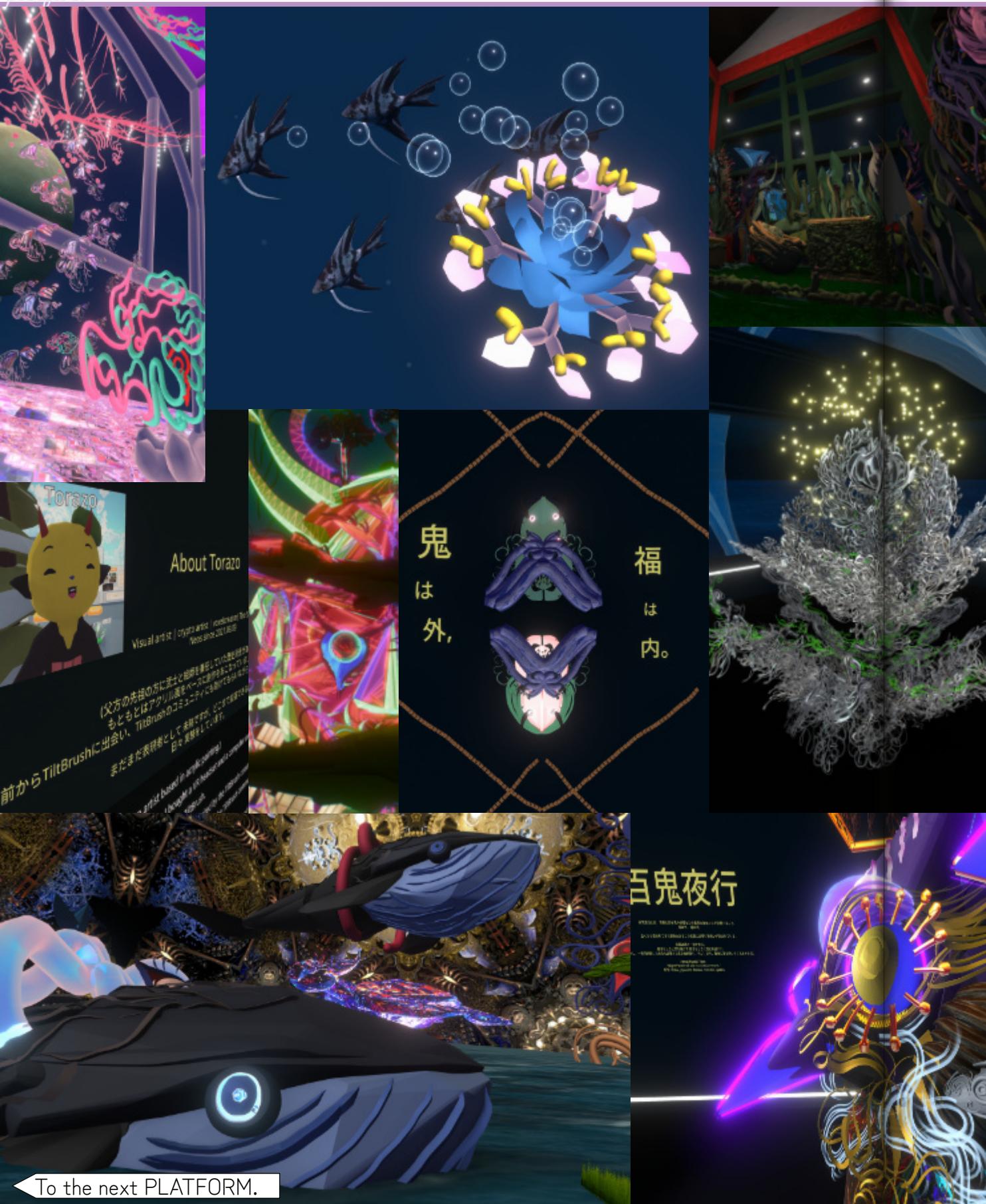
なって、この小さな日本の美で存分に寛ぐことができる。

Torazo氏はもともとTilt Brush（チルトブラシ）というVRお絵描きアプリを使っていた。そのアプリを使うコミュニティ内の先輩たちに誘われ、clusterのGAMEJAMやNeosVRのMMCなどといったイベントに参加したのが、VR内で作品を展示するキッカケになったという。NeosVRの機能とTilt Brushを掛け合わせるなど、Torazo氏は日々新たな芸術の形を創っている。

「Torazo Solo Exhibition 2022は未完成のミュージアムだが、完成することが完璧だとは思っていない」と、Torazo氏は語った。もしかしたら、彼女の作品にインスピレーションを受けて、カオスから新たな芸術を、創り出すのは貴方も知れない。

その他にも壁に展示された、浮世離れした芸術の数々を堪能したら、階段を登つてみよう。笑う鬼の門で待っているのは八咫烏（やたがらす）、背中に乗つて空を飛べば爽快だ。二階に上がったら、掛け軸の仕掛けが面白いいろいろ首を左手に見ながら、灯籠の中に入つてみるべし。そこはミニマムな庭園になつていて、慣れたら人ならスケーリング機能で小人

（文..sun）



To the next PLATFORM.

Worlds created by **Torazo**

Available in NeosVR

🔍 **Maliruv Dum**

🔍 **Blue -relax-**

🔍 **Torazo Solo
Exhibition 2022**



新宿

歌舞伎町

歌舞伎町

「混沌」と
「秩序」の

環を歩く

「混沌」をことさらに強調するものが嫌いだ。例えば、サイケデリックな色使いとめちゃくちゃな音声をめちゃくちやに鳴らしてみたりして、

あるいは明らかに意味がない筋立てで話をしたりして、「混沌」を演出すること。これを私は「養殖もの」と呼んでいる。

真の「混沌」とは、ひとつひとつの要素は真剣に、「秩序」を求めているのに、全体で見た時にはそれらが全くかみ合わず、結果的に無秩序になっているもののことだと思う。例えば、昔台湾で見た夜の市場。一軒一軒の店は、屋台は、美味しい料理を作る真摯な店だが、それらが大量に集まってしまえば急速に無秩序になり、「混沌」が生じて独特の気配を感じさせる。これこそが「天然もの」である。

そう、「天然もの」の「混沌」は街の中にある。例えば、今私が立っている新宿歌舞伎町に。

私は歌舞伎町を「前」と「後ろ」と勝手に二つの領域に区分している。「前」は有名な入り口の門からゴジラのホテルと言われる東宝のホテルがある周囲のことだ。昨今、不良少女で有名な「トーキー横」もこの領域だ。

写真／ニッポン編集長



Real World

新宿 店知れぬ

混沌の中



新宿

「前」における「混沌」はその街並みにある。一軒一軒は真剣に、酒を提供し、性を提供しようとしているのだが、それらがまじりあった結果、風俗の無料案内所と居酒屋チエーンが隣接し、アジア系の飲食店と意外屋が隣接することになっている。

だが歌舞伎町の「混沌」、その神髄はゴジラホテルの奥の方、つまり私が「後ろ」とよぶ領域にこそある。横一線に引かれた道路が領域を区分するこの道路を越えればそこはラブホテル街で、派手な概観と目立つ「休憩●●●円！」の大きな看板があちらこちらにある。この「後ろ」における「混沌」は、そこを歩くだろう人に・・・多くは「そういう」男女に、頭の片隅で求められてもいる。

ラブホテル街であるから、大部分の男女は「そういうこと」のためにこの周辺を歩いている。男性も女性も、タイミングを計りながら雑談をしつつ歩いている様子が、聞くとはなしに聞こえてくる声からわかる。妙な緊張感があり、どちらが先に「無秩序」な性の解放を仕掛けるかの間合いを計っている。さながら、達人同士のにらみ合いのようだ。

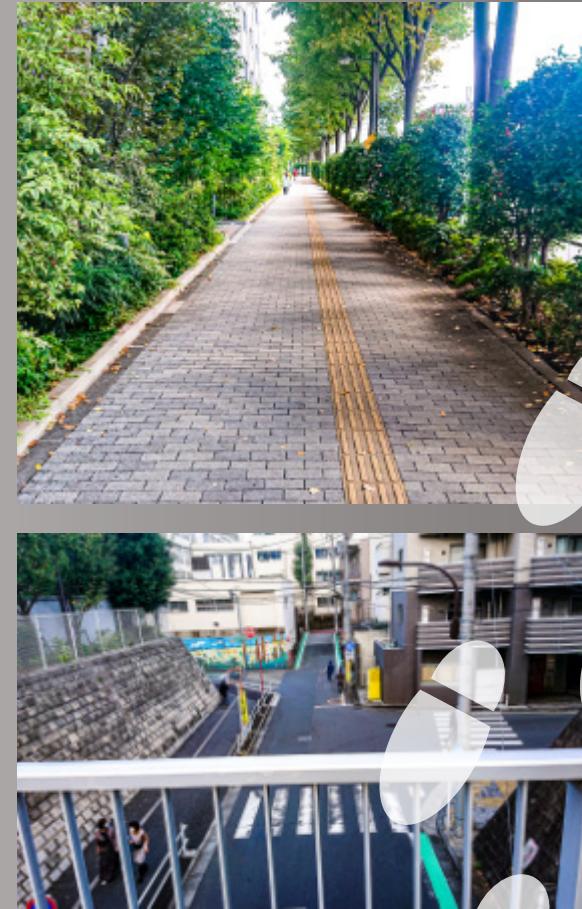
今、前にいる男女が、女性側から「仕掛け」、ついに90分数千円の宿にはいった。「秩序」を文字通り脱ぎ捨て、ついに「無秩序」へと移行する。この間合いを計る会話、達人同士のにらみ合いがあちこちで起るのが「後ろ」だ。

私はそんな妙にひりついた空気と「秩序」が「無秩序」へと転換する一瞬が交錯する「後ろ」が大好きなのだ。

そんな歌舞伎町の「後ろ」も抜け、JR高田馬場駅の方まで歩くことにする。30分くらいはかかるだろうか。秋の涼しさのおかげで歩くことは苦にならない。

西武新宿線の線路に沿って歩いてしばらくすると、エスニックな香りが漂ってくるのを感じ、若い女性が沢山いることが分かれば、そこはもう新大久保、コリアンタウンだ。日本国内にあり、日本人がいて、聞こえてくる言語は日本語であるはずなの

秩序へ



混沌から

高田馬場

新大久保

「秩序」から欲望渦巻く「混沌」へ、「混沌」から日常の「秩序」へ。人々はこの円環の中に日々の生活を送っているのか。

さて、JR高田馬場駅に到着した。ここはもちろん「混沌」の場。そしてさらに大きな「混沌」へ繋がる円環、山手線に乗って、私は次にどの「混沌」に向かおうか。

そうか。

しかし、こうやって街を歩いてみれば、この街は、大きな「混沌」が渦巻く場所と、その谷間に「秩序」に満たされた平穏な空間があることに気が付く。

さらに歩いていくと、反対側から大声で話ながら歩く青年の集団がやってきた。ああ、どうやら日本で一番有名な校歌を持つ大学の学生であるようだ。その大学からは徒歩20分といったところか。平穏な「秩序」の領域は思ったよりも狭いようだ。

人々は自分の生活を送り、「混沌」の正反対の中に生きる。

「租界」を抜けて高田馬場方面へ歩いて行くと、この道には「下」があり、陸橋になつてある箇所がある。橋の上から「下」を見ると、どうやら奥の方に小学校か何かがあることがわかる。10分前の新大久保の喧噪も、50分前の歌舞伎町での間合いを計る会話からも離れて、ここには児童が生活できる「秩序」がある。

そんな「租界」も完全ではなく、コリアンタウンの中心に、古い日本式の家屋一といつても所謂日本家屋ではなく昭和中期に建てられたようなものである一が残つてゐる。これもあり、本来あっておかしくない日本式の廃屋が反対に異質なものとして、食い込むように存在してゐる。たった一軒の廃屋が、コリアンタウンに「混沌」をもたらしてゐる。

に、明らかに「違う」空気が漂つてゐる。なんというか、韓国の飛び地がここにあるかのようだ。戦前、歐米諸国や日本が海外の国家に置いた租界というの、外国人街とは方向性は正反対であるが、案外こういう雰囲気なのかもしねれない。

Gravure : ORGANISM

撮影 : Tokikaze

VR CHAT



station

Resting Remains

執筆 : ヤマノケ
撮影 : みくにき



Co cluster

チキンASMR

執筆&撮影
: sun



NEOS
THE METAVENGE

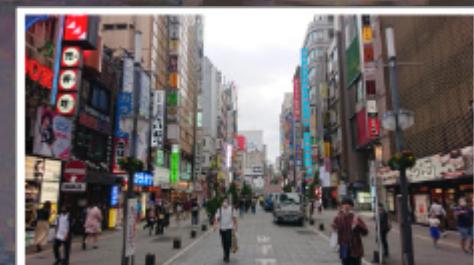
Torazo's World

執筆 : sun
撮影 : オージュ



新宿・歌舞伎町

執筆&撮影 : ニッソちゃん



感想などは
#Platform通信欄
へぜひお寄せください！

Vol.3

Platform あとがき



ニッソちゃん
編集長



思惟かね
編集/デザイン



混沌の渦から出られましたか？まだぼーっとしますか？頭を振って顔を拭いて。お手持ちの切符はそのままで。次の駅は「冬」です。



SUN
ライター



みくにき
カメラマン



両親が家に来たとき、母にはせきぐちあいみさんの個展を、父にはフェラーリに乗れるワールドに案内して楽しんで貰いました。特別な活動をしなくても、VRは楽しいのです。



わく
ライター/校正



ヤマノケ
ライター



「混沌」という一つの切り口で、ここまで方向性の異なるワールドがあることを知れたのが楽しかったです。



オージュ
カメラマン



Tokikaze
カメラマン



最近友人がVRを始めてくれて、どこのワールドに連れて行こうか考えてわくわくしている日々です。



Nag
校正



燕谷古雅
編集/デザイン



混沌に遭ったその息遣いまで文字起こしした……そんな切迫感に満ちた本号もまた、誰かの「異界駅」の一つとなりますことを。

STAFF

編集長 | Editor Chief
ニッソちゃん

誌面デザイン | Graphic Design
思惟かね
燕谷古雅

執筆 | Writer
ヤマノケ
sun
ニッソちゃん

校正 | Proofreading
Nag

撮影 | Photographer
Tokikaze
みくにき
sun
オージュ
ニッソちゃん
わく (裏表紙)

To the next JOURNEY.

Platform Vol.3 【混沌の中に】号

発行 : Platform編集部 2023/1/1

2023.1.1

Our
Journey
Continues...

Platform

Vol.3 混沌の中に